

プレスリリース

2020年11月6日
国境なき医師団 (MSF)

モザンビーク：戦闘で避難民が 40 万人に急増 人道援助が急務に

モザンビーク北部のカーボデルガード州で、武装勢力による攻撃と政府軍との長引く武力衝突により、40 万人余りの人びとが住まいを追われ、国内避難民となっている。人びとの多くは、過密状態での暮らしを強いられ、飲料水の確保にも窮する厳しい生活を送る。はしかや感染性の下痢症、新型コロナウイルス感染症など、さまざまな健康リスクに直面している。国境なき医師団 (MSF) は、避難民への援助は基本的なニーズすら満たしていないと、現地当局に対し人道援助の規模拡大を支援するよう訴えている。

激増する避難民

「先週だけでおよそ 1 万人の避難民が、ボートで海を渡り州都ペンバに到着しました。多くの人が脱水症状を起こしていて、中には海上で出産した女性や、致命的な重度下痢症に陥った人もいます。先月 1 か月間に 2 万人が到着し、今後さらなる増加も予想されるため、現地の医療スタッフは緊張状態にあります」。カーボデルガード州で MSF のプロジェクト・コーディネーターを務めるジョアキム・グイナルトは話す。

ペンバ市とその周辺では、約 10 万人が校舎などの一時避難所や地域住民の家に避難しており、市の人口はそれまでと比べて 3 分の 1 ほど増加した。多くの避難民は、清潔な飲料水が手に入らず、また不衛生で過密な環境にいるため、マラリア、はしか、下痢症、新型コロナなどの感染症から無防備となっている。

医療サービスの縮小と雨期の到来

同州で 2017 年 10 月に始まった戦闘は激化する一方で、終結の気配はない。州の人口の 5 分の 1 近くが自宅を追われ、医療やその他のサービスをほぼ利用できていない。MSF も今年 3 月、州北部モシンボア・ダ・プライアで行っていた医療活動が中断に追い込まれ、5 月には州中部マコミアでの武力攻撃で、MSF の診療所も略奪と放火の被害に遭ったため、同地域での活動も中止に追い込まれた。紛争が始まって以来、推定で 20 カ所余りの医療機関が破壊されている。

MSF は拠点をペンバ市内に移し、避難民や地域住民への医療援助を行っている。それでも州内での活動維持は困難が尽きない。運営面での制約や新型コロナによる渡航制限によって、ニーズが急増しているにも関わらず、最低限の人員で対応せざるを得ないからだ。

国内避難民の急増を受け、MSF は 9 月にペンバからほど近いメトウゲ地区で移動診療所を開設。今後は遠隔地でも医療を受けられるようにするため、10 月 28 日に 2 番目の移動診療所も立ち上げた。ま

た、避難所や医療施設で水と衛生設備の支援を行い、ペンバでは下痢症治療センターを運営している。来る雨期に備えて安全な水を確保するために、MSF はパートナーと共にメトゥゲ地区で 150 基のトイレを設置、27 台の手動給水ポンプと 5 つの給水網の修復も行った。だが、この地域で増大するニーズからすれば、こうした活動はごく一部に対応したに過ぎない。

モザンビークで MSF の現地活動責任者を務めるアラン・カツサは次のように話す。「MSF は、カーボデルガード州での暴力と治安状況の悪化、そして雨期に避難民が急増していることを深く憂慮しています。人道援助の努力は続いています、基本的なニーズを満たすにも程遠い状況です。いまずぐ行動しなければ、事態は急速に悪化しかねません。MSF は滞りなくスタッフの追加動員と物資の搬入が行えるよう、モザンビーク当局に対し支援を要請しています」

MSF は 1984 年にモザンビークで活動を開始。ペンバ市では、保健当局の支援を通じて上下水道の改善や、感染性下痢症の集団発生に備えた対応を行っている。MSF はマプトとベイラ市では進行性 HIV、結核、肝炎などの患者や弱い立場にある人びとのケアを担っている。またすべてのプロジェクトで、MSF はモザンビーク保健省による新型コロナ対策を支援。感染制御、トリアージ、感染発生状況の監視などの予防措置を実施している。

以上

本件に関するお問い合わせ先：

特定非営利活動法人 国境なき医師団日本 広報担当：舘 俊平

TEL：03-5286-6141 携帯：080-2344-0684 FAX：03-5286-6124

E-mail: press@tokyo.msf.org <http://www.msf.or.jp>

 メディア向けツイッターアカウント：@MSFJ_Press